

ナイチンゲールが残した知られざる八つの業績

金井一薫

ナイチンゲール看護研究所・所長／徳島文理大学大学院・教授

はじめに——伝説化されたナイチンゲール

二〇二〇年五月二二日は、ナイチンゲール生誕二〇〇年にあたる記念すべき日です。すでにWHO(世界保健機関)は、第七二回総会(二〇一九年五月二四日)において、二〇二〇年を「国際看護師・助産師年」とする提案を採択しました。東京オリンピック開催の年とも重なり、日本の看護界は至る所で社会にアピールする企画を立案しています。

さて、フローレンス・ナイチンゲール(一八二〇～一九一〇)は、看護を創設した人物として広く知られており、伝記も数多く出版されて、看護師という職業は少女たちのあこがれの1つとなっています。しかし彼女の素顔や業績

について真に理解している人は、そう多くはないようです。むしろ彼女の生涯はある側面が誇大視され、歪められて伝えられています。

第一に、ナイチンゲールが戦場で敵味方なく看病したという記述はどこにもありません。

戦場で敵味方なく看護にあたったのは、赤十字社を創設したアンリ・ジュナンです。ナイチンゲールはアンリ・ジュナンと重ねてイメージされているところがあります。第二に、ナイチンゲールは看護師は自己犠牲を惜しま



ぬ白衣の天使であるべきだ」と強要した人ではありません。彼女は「看護の仕事は、快活な、幸福な、希望に満ちた精神の仕事です。犠牲を払っているなどとは決して考えない、熱心な、明るい、活発な女性こそ本当の看護師といえるのです」と書き残しています。この言葉こそ、ナイチンゲールが看護師たちに望んだ資質だったのです。

第三に、ナイチンゲールには一生を臨床で身を粉にして献身的に働いた女性というイメージがありますが、三六歳の時にクリミア戦争から帰還したその後の五四年間は、ほとんどベッド上の生活を余儀なくされ、看護師としてユニフォームを着て働いたのは、九〇年の生涯でなんと三年弱しかなかったのです。

しかし、ほとんど外出がかなわない状況にありながら、この間にナイチンゲールが成し遂げた仕事こそ、クリミア戦争での活躍をはるかに越えて、後世に残る偉業だったのです。

本稿では、ナイチンゲールが書き残した膨大な著作を紐解き、そこから浮き彫りにされる「ナイチンゲールが残した知られざる八つの業績」について紹介していきます。



ロンドンに立つナイチンゲール像

1 著述家としてのナイチンゲール

クリミア戦争末期に感染症（ブルセラ病？）に罹患したナイチンゲールは、それを原因とする症状に長年苦しめられ、

帰国してからの大半の人生を一室に籠つて仕事をするこゝを余儀なくされました。

ところが、ロンドンのマンションで起居する彼女の自室は、現代でいえば、さながら国民の健康と医療の制度について探求・研究する「シンクタンク」のようでした。自らの提言で政府内に様々の諮問委員会(時には勅撰委員会)を組織し、情報を収集し、調査表を作成し、それらを整理してまとめ、そして報告書を書く……という仕事を、何人かの才能ある親しい人々の援助は受けていましたが、基本的には自らの意思と企画によつて成し遂げていきました。しかもそれらは際限もなく続き、眠る時間さえないほどの仕事量のために、衰えた体力は回復せず、体調不良の状態は慢性化していき、とうとう二度とユニフォームを着て病院という現場に立つことはなかったのです。

ナイチンゲールが手がけたテーマは、病院や看護組織の改革の問題、看護師教育創設の問題、陸軍兵士の健康問題、植民地インドにおける人々の健康と幸福の問題など、実に多彩でした。国民にとつて重要と思われるテーマについては著書を出版して啓蒙し、依頼された原稿や講演録を執筆し、政府に向けて膨大な提言書を書くというぐあいで、結果的に彼女が書き残した著作物は、大別して、一五〇点に

もおよぶ「印刷文献」と優に一万点を超えるといわれる「手稿文献」(手書きで遺された書簡類やメモや日記など)とに類別されます。それらの大半はカナダ・ゲルフ大学名誉教授のリン・マクドナルド博士(社会学)によつて、二〇〇年をかけて世界各地から収集され、全一六巻の『ナイチンゲール著作集成』²⁾として出版されています。

著作の内容は今日的視点から見ても決して色褪せて古びたところなどなく、それどころかそれらは不朽の名著の数々であり、この事実からナイチンゲールは、まさに「偉大な著述家」であったと言うことができるのです。

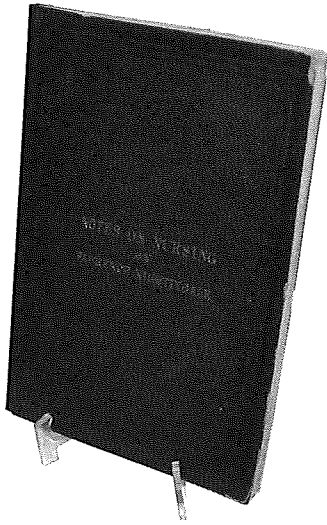
2 看護の発見者としてのナイチンゲール

ナイチンゲールは、『看護覚え書』(初版一八五九年)において、人類史上初めて「看護とは何か」を明らかにしました。それは当時の最新の生命科学の知見を土台にして提言されたもので、看護界を今日までリードしてきている思想です。ナイチンゲールが『看護覚え書』のなかで述べた「看護の定義」は以下の内容でした。

・定義一…看護がなすべきこと、それは自然が患者に働きかけるのに最も良い状態に患者を置くことである。

・定義2…看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えること、こういったことのすべてを患者の生命力の消耗を最小にするように整えること。

ここでナイチンゲールが強調したのは、人間は生まれながらにして体内に「自然治癒力」や「回復のシステム」を備えているという点でした。体内でそのシステムを十分に発動させることで、病気からの回復をはかることが看護の働きであると言い、そのためには患者を取り巻く生活のすべてを、最良の条件に整えることが看護師の仕事であると明言しました。



『看護覚え書』初版本（1859年出版）

ここに近代看護の方向軸が定まりました。看護は医師の指示を受けて働く助手ではなく、看護の視点で患者を観察し、患者の生命力の消耗を最小にしながら、病気や症状からくる生活の不自由や制限による苦痛を取り除くように、生活を健康的に創り変える専門家としてデビューしたのでした。

3 教育者としてのナイチンゲール

クリミア戦争から帰還したナイチンゲールの元に、国中からその業績を讃えて寄付金が寄せられました。金額はおよそ四五、〇〇〇ポンドであったと言います。現在の価格では、一ポンドを二万円として換算しますと、およそ九億円になります。そこでナイチンゲールの希望を取り入れて「ナイチンゲール基金管理委員会」が設立され、この寄付金を元手にした「ナイチンゲール看護師訓練学校」が開設されました。開校日は一八六〇年六月二十四日でした。

ナイチンゲールは世界で初の看護師訓練学校に相応しい教育者と訓練場所を選定するのに苦労しました。特に訓練を授ける実習場として「優れた看護を展開している病院」を探すことは困難だったようです。結果として「聖トマス病院」

が指名されました。

学生たちは「ホーム(寄宿舎)」に住み暮らし、座学と実習とにエネルギーを注ぎました。カリキュラムはきちんと整理され、教員(シスター)たちもナイチンゲールと綿密に打ち合わせをしながら、学生を育てていきました。

一八七一年にテムズ河沿いに新聖トマス病院が設立されると、それに伴って入学者は一五名から三〇名に増員され



晩年のナイチンゲールと弟子たち(姉が嫁いだクレイドンハウスにて)

ました。一九世紀末には、三二名の定員に対して、一年に一五〇〇名もの志願者があったほどに人気が高かったようです。卒業生の評判は高く、「ナイチンゲールナース」と呼ばれて、国内外に指導者として赴任していきました。

ナイチンゲールは病床にあつて直接教育に携わることはありませんでしたが、常に学生たちの動向に気を配り、相談相手になっていました。晩年になると一年に一回、在校生と卒業生に向けて、長い書簡を書き認めています。一八七〇年〜一九〇〇年の間に一四編の長い書簡があることがわかっています。今ではこれらの書簡はすべて日本語に翻訳されており、書簡からはナイチンゲールの想いが伝わってきます。看護に悩んだとき、私たちはいつでもナイチンゲールの声に耳を傾け、看護師のあるべき道を確かめることができるのです。

4 優れた看護管理者としての ナイチンゲール

ナイチンゲールが女性としての自立を果たし、自らが抱いていた長年の希望を叶えて看護師の職に就いたのは三三歳の時でした。初体験はロンドンのハーレイ街一番地にある「恵まれない境遇にある女性家庭教師たちのための病院」

における総監督という仕事です。

この病院は富裕層がお金を出して設立したボランタリー病院ですが、反目し合う「貴婦人委員会」と「紳士委員会」により病院の経理は乱脈を極め、さらに病院の管理運営のあり方も混乱を極めており、崩壊寸前にありました。委員会がナイチンゲールに寄せた期待は、病院の建て直しとその健全な運営の回復というたいへん重いものでした。ナイチンゲールは嬉々としてこの任につき、就任にあたって両委員会に以下のことを求めました。

- ① 温水用の配管を各階に引くこと
- ② 患者の食事を上階に運び上げるための「巻き上げ機」(リフト)を設置すること
- ③ 現在のナースコールの原型である「弁付き呼鈴」を設置すること

これらは何れも画期的な提案ですが、実現にこぎつたようです。

この病院での経験はわずか一年でしたが、彼女は病院経営に力を注ぎ、傾きかけていた病院を再建させただけでなく、自ら模範的な看護実践をして看護の質の向上にも寄与しています。⁴ この民間病院における「優れた看護管理者」としてのナイチンゲールの顔は、これまでほとんど知られて

いません。

さらに一年の延長を契約しようとしたとき、クリミア戦争が勃発しました。戦場の惨状を新聞で知ったナイチンゲールは、これこそ自己の使命であると直感し、淑女病院での仕事を辞退して三八名の看護師を募って戦場に赴きました。クリミア戦争におけるナイチンゲールの活躍は、多くの書物が語っていますからここでは詳細を省きますが、クリミア戦争においてナイチンゲール看護団が存在しなかったならば、兵士の死亡率はさらに高くなり、惨たらしい状況が報道され続けたことでしょう。さらに看護師という職業も現在のような発展はなかったかもしれせん。

大きな功績を残したナイチンゲールですが、彼女自身は私記の中に「私は地獄を見た。私は決して忘れない」⁵と何度も何度も書き記しています。クリミア戦争に出征した英国兵士の数は、約九万八〇〇〇人でしたが、うち二万八〇〇人が死亡しました。⁶ 短期間に多くの死者を出した実体験は、その後のナイチンゲールの生き方に大きな影響をもたらしました。ナイチンゲールの社会改革への情熱は、まさにクリミア体験がもたらしたものであったといえるでしょう。

5 衛生改革者としてのナイチンゲール

クリミアから帰還後のナイチンゲールの著作を紐解きますと、随所に当時の英国の、とりわけ都市部における生活環境が、いかに不潔で不衛生きわまるものであったか、またそれによる国民(特に貧困階層)の死亡率が、いかに高かったかを指摘した文書に出会います。

この点に関心を寄せたナイチンゲールの後半生の仕事の大半は、不衛生で不健康な生活環境に対する国民の意識を改善し、具体的な衛生対策を提言し、それを政府や議会を通して具体的に実現させるというものでした。『すべての国民を健康にすることが彼女の目標でした。ナイチンゲールは『実力ある衛生改革者』の一人となったのです。一九世紀においては、国民の死亡原因の第一位は「感染症」によるものでした。しかもその死亡率は生半可な数値ではなかったのです。コッホによって結核菌が発見され、感染症には必ずそれを発症させる病原菌が存在するところが証明されて、予防というテーマが形をなすようになるのですが、それらはすべて一八八二年以降のことです。一八八〇年代以前にあって、ナイチンゲールは終始一貫

して「感染症は予防できる」と主張していました。そのためには清潔で健康的な生活環境と、健康的な暮らしの営みが不可欠であると説いたのです。現代ではごく当たり前になっている発想が、当時の一般の人々の間では、まだ浸透していませんでしたから、ナイチンゲールは、国民が信じて疑わない古い風習や古い思想と、真つ向から戦わなければなりませんでした。

ナイチンゲールの『感染防止策』は以下のようなものでした。

- a… 開け放した窓から、新鮮な空気を取り入れること
- b… 部屋の清潔を保つこと
- c… 陽光を取り込むこと
- d… ひとつ屋根のもとに、多数の病人を密集させないこと
- e… 室温を下げないこと(寒がらせないこと)

f… 病院が本来の機能を發揮し、感染を防止するためには、病院の構造や立地条件などを考慮すること

実に単純明快でわかりやすい内容ですが、人類の多くが長年にわたり苦しめられてきた感染症の実態を見つめてみますと、その根っこにあるものは、不潔、貧困、無知であることに思ひ至ります。それゆえに、ナイチンゲールの指摘は実を射たものであり、時と場所を超えて実践して

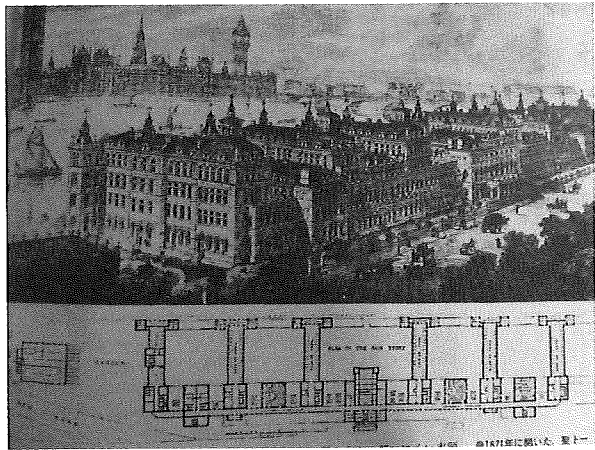
いかなければならない、普遍的な見解であると納得できるのです。

6 病院建築家としてのナイチンゲール

「感染症は予防できる」と考えたナイチンゲールが、当時最も心を痛めていたのは、本来病人を病気から回復させるための施設であるべき病院が、その病人の詰め込みや、病院管理のあり方の誤りや、そして何よりも病院の建築構造そのものの欠陥によって、却って病状を悪化させ、さらには二次感染(院内感染)を誘発する温床となつて、死亡率を上昇させているという現実についてでした。

そのためにクリミア戦争から帰国後の彼女は、陸海軍の病院だけではなく、一般の公立病院や民間病院の実態に目を向け、とりわけ病院建築のあり方について考察を深め、数々の提言を行っています。病院建築のあり方に関するナイチンゲールの指摘や提案の大意は、『病院覚え書』⁷という著作にまとめられ、冒頭には「病院がそなえているべき第一の必要条件は、病院は病人に害を与えないことである」と記されています。

ナイチンゲールは徹底的に国内外の病院建築様式を研究



1871年に新築された聖トマス病院全景

したようです。そして自ら理想とする病院の設計図を考案しました。それは「ナイチンゲール病棟」と呼ばれるパビリオン方式の病院でした。一八七一年、ナイチンゲールが指摘した条件を満たした病棟が、ナイチンゲールの指導のもと、ロンドンのテムズ河添いに新築された「聖トマス病院」に反映されました。近代病院建築のモデルとして歴史に残

るデザインです。

パリオン式の病院構造を推奨したナイチンゲールの病院に対する考え方は、その後英国のみならず様々な国で取り入れられ、ナイチンゲールの「病院建築家」としての実力は、その道の専門家たちに広く知られるところとなりました。ナイチンゲール著『病院覚え書』は、今も病院建築の専門家の間では、病院建築の原点を示す古典として高く評価されています。

7 統計学者としてのナイチンゲール

若い頃から数学や統計学という領域に強い関心を寄せて、その研鑽を積んだナイチンゲールは、当時としては最先端の知見と技術を修得し、かつて誰も手をつけなかった英国陸軍の衛生問題全般に対する適格な指摘を行うことができたのでした。

統計学者としてのナイチンゲールという側面は、クリミア戦争における英兵士たちの死亡の原因究明を、統計学的に立証したこと、および病院統計という考え方を確立したという点に求めることができます。

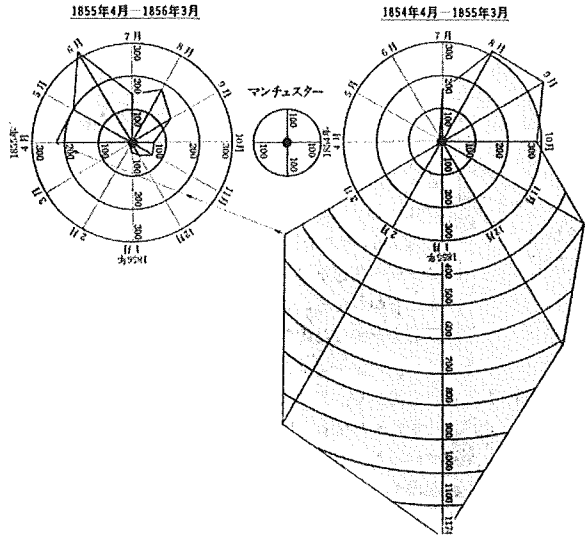
統計学的手法を用いてある事実を明らかにしようとする

研究方法は、現代ではごく当たり前ですが、ナイチンゲールの時代にこうした手法を使う人はきわめて稀でした。例えば、ナイチンゲールは死亡率を視覚に訴えようとして「バツ・ウイング」(こうもりの翼というグラフを作成しました。それによって兵士の死亡率がいかに高かったかを証明したのです。さらに別の円グラフを作成して、死亡原因は感染症であることも示しました。当時は、まだ棒グラフや円グラフが一般的に認知されていない時代にあつて、ナイチンゲールは独創的な図表を数多く考案しているのです。

次頁の図は一八五四年四月から一八五六年三月までの病院における東洋の陸軍の一、〇〇〇人あたりの年換算死亡率を示しています。いちばん内側の円は「もし仮に陸軍の死亡率が、英国で最も不健康な都市マンチェスターと同じ死亡率であったなら、死亡率はどれくらいになるか」を示しています。このように表示することで、クリミア戦争でいかに多くの兵士が亡くなったのかを証明しました。

統計学的才能を遺憾なく発揮したナイチンゲールは、統計学者として高く評価され、一八七四年一〇月には、米國統計協会より名誉会員に推薦されてその業績を讃えられたのでした。

東洋における陸軍



ナイチンゲール作図のバツツ・ウィングのグラフ⁸

8 社会改革者としてのナイチンゲール

ナイチンゲール四〇歳代最後（一八六九年）の著作に、『救貧覚え書』⁹という短い寄稿論文がありますが、これはナイ

チンゲールの社会改革者としての側面を見事に示しています。

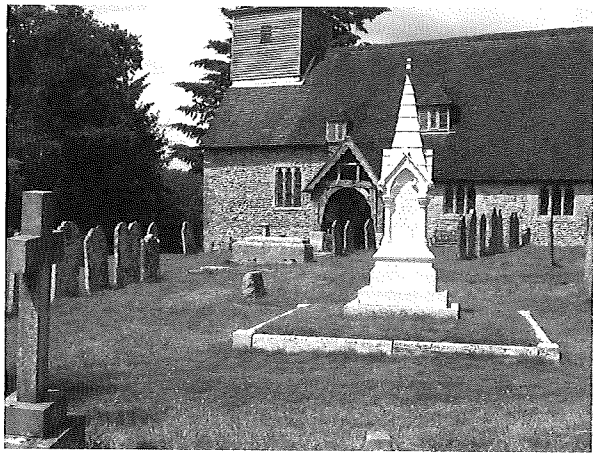
貧富の差が激しさを増し、貧者を人間として認知しないという長年の社会風潮の中で、ナイチンゲールが本著で強調したことは、すべての人間の対等性についてであり、人が社会的弱者に対して援助するときの基本は、物や金を与える「慈善行為」にあるのではなく、「自立と自己実現」を目指す援助のあり方にあるとした点でした。ナイチンゲールのこの姿勢は、時代を一〇〇年以上も先取りしたものでした。

一方で当時の政府は、従来の「救貧法」という法律を改正するなど、必要な対策を立てていたのですが、莫大なお金をつぎ込んでも、一向に貧困者の数を減少させることはできず、彼らの生活を向上させることは至難の業でした。そこでナイチンゲールは「救貧院」の実態調査を行い、貧困者を「病气や老いによって働けない人々」と「働ける健康な体を持った人々」とを区別し、彼らには各々異なるケアが必要であると訴えました。それは当時の慈善事業を根底から改革する提案であり、このナイチンゲールの提案は、一八六七年に「首都救貧法」の制定となって姿を現しました。これにより英国の福祉（慈善事業）は大きく転換することに

なつたのです。この法律はその約八〇年後に「ゆりかごから墓場まで」と謳われ、世界の保健医療福祉のモデルとなつた「国民保険サービス法」につながる第一歩として位置づけられるほどに価値があるものでした。今日につながる看護と福祉の制度を創設したのはナイチンゲールだつたと言えるのです。ナイチンゲールのこうした業績は、日本の看護界だけでなく社会福祉界においても、これまでほとんど知る人はいませんでした。

おわりに——理想を高く掲げて

ナイチンゲールの幅広い業績を8つに分類し、知られざる業績として紹介してきました。その一つひとつの業績は、どれも鮮やかで奥深く、時代の先端をいくものです。そこにはナイチンゲールが目指した「人間が人間らしく生きていける社会の創造」と「国民の病からの解放と健康の増進」、さらには「清潔で健康的な暮らしの実現」という目標がありました。この目標は本来の看護がめざすべき方向や理念と完全に一致したものです。



聖マーガレット教会にあるナイチンゲール家の墓

注

- 1 浜田泰三訳・ナイチンゲール書簡集、一〇〇頁、山崎書店一九六四。
- 2 McDonald Lynn, *The Collected Works of Florence Nightingale*, 16Vols, Wilfrid Laurier University Press, Waterloo, Ontario, Canada, 2001-2012.
- 3 湯槇ます他編訳、新訳・ナイチンゲール書簡集―看護婦

と見習生への書簡、現代社、一九七七。

- 4 F・ナイチンゲール、薄井坦子他訳、病院監督から責婦人委員会への季刊報告「ハーレイ街病院の看護管理」一八五三〜四年（看護小論集、八一〜一四頁）、現代社、二〇〇三。
- 5 セシル・ウーダム・スミス、武山満智子・小南吉彦訳、フロレンス・ナイチンゲールの生涯（上巻）、三五三頁、現代社、一九八一。
- 6 オーランド・ファイジズ、染谷徹訳、クリミア戦争（下）、二七四頁、白水社、二〇一五。
- 7 F・ナイチンゲール、湯楨ます監修、薄井坦子他訳、病院覚え書一八六三年（ナイチンゲール著作集、第二巻、一八五〜三三三頁）、現代社、一九七四。
- 8 『総合看護』第二四巻、第一号、二五頁。
- 9 F・ナイチンゲール、金井一薫訳、救貧覚え書（ケアの原形論、二二六〜二七三頁）、現代社、二〇〇四。

参考文献

- F・ナイチンゲール著、湯楨ます・薄井坦子他訳、『看護覚え書』第7版、現代社、二〇一一。
- 金井一薫・ケアの原形論、現代社、二〇〇四。
- 金井一薫・実践を創る 新・看護学原論、現代社、二〇一二。
- リン・マクドナルド著、金井一薫監訳、島田将夫・小南吉彦訳、実像のナイチンゲール、現代社、二〇一五。